岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 63

西　奥　遺　跡

1986年3月

岡　山　県　教　育　委　員　会

序

本報告書には，御津工業団地造成工事に伴って実施した西奥遺跡の発掘調査結果を収載しました。

御津工業団地造成工事につきましては，事前の協議において周知の古墳群を工事対象から除くなど，埋蔵文化財の保護・保存に努めてまいりましたが，当該遺跡が削土工事直前に発見されたこと，その他の事情から工法変更による保存が不可能であったため，発掘調査を実施したものであります。

調査の結果，御津町では今まで知られていなかった弥生時代後期の墓址の一端を明らかにすることができました。

その成果を収めた本報告書が，埋蔵文化財の保護保存のために活用され，また，地域の歴史を研究する資料として役立てていただければ幸いに存じます。

最後になりましたが，調査にあたっては，御津町教育委員会，岡山県商工部企業立地対策課，住友建設（株）・（株）元川建設・御津建設事業（協）共同企業体他関係各位の御理解と御協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

昭和61年 3 月

岡山県教育委員会

教育長　宮　地　暢　夫

例　言

1. 本書は，岡山県教育委員会が岡山県商工部の依頼を受けて実施した，御津工業団地造成工事に伴う西奥遺跡発掘調査の報告である。

2. 遺跡は御津郡御津町宇垣字西奥に所在する。

3. 発掘調査は岡山県古代吉備文化財センターが担当し，文化財保護主事光永真一が担当して，昭和60年11月25日から12月９日まで実施した。

4. 発掘調査にあたっては，住友建設㈱・㈱元川建設・御津建設事業㈱共同企業体，御津町教育委員会，岡山県商工部企業立地対策課他，関係各位の理解と協力を賜った。記して謝意を表したい。

5. 本書の執筆・編集は光永が担当した。整理の一部を，文化財センター職員内藤善史・宇垣匡雅が補助した。

6. 出土遺物，実測図，写真等は岡山県古代吉備文化財センター（岡山市西花尻1325-3）において保管している。

7. 本書に使用したレベル高は海抜高である。方位は第２・５図が真北で，他は磁北である。

8. 本書第２図に使用した地形図は，建設省国土地理院発行の25,000分の１地形図（金川）を複製したものである。

目　　次

序
例　言
Ⅰ．地理的・歴史的環境…… 1
Ⅱ．調査の経緯…… 4
　1．　調査に至る経緯…… 4
　2．　調査体制…… 5
　3．　日誌抄…… 5
Ⅲ．調査の概要…… 6
　1．　第1調査区…… 6
　2．　第2調査区…… 6
　3．　第3調査区…… 8
　4．　第4調査区……10
　5．　第5調査区……14
Ⅳ．まとめ……15

図　目　次

第1図　御津町及び西奥遺跡の位置…… 1
第2図　周辺遺跡分布図（1／25,000）…… 2
第3図　第1調査区全体図（1／150）…… 6
第4図　第2調査区全体図（1／150）…… 6
第5図　地形及び調査区位置図(1／3,000)…… 7
第6図　第3調査区全体図（1／150）…… 8
第7図　第3調査区確認調査出土遺物（1／4）…… 8
第8図　土壙1（上）・土壙2（下）（1／60）…… 9
第9図　土壙2出土遺物(1／4)…… 9
第10図　土壙3（1／60）・出土遺物（1／4）……10
第11図　土壙4（1／60）……10

第12図　第４調査区全体図（1／150）……11
第13図　土壙５（1／60）……12
第14図　土壙６（1／60）・出土遺物（1／4）……12
第15図　土壙７（1／60）・出土遺物（1／4）……13
第16図　土壙８（1／60）……13
第17図　土壙８出土遺物及び第４調査区確認調査出土遺物（1／4）……13
第18図　第５調査区全体図（1／150）・土壙10出土遺物（1／4）……14
第19図　土壙９（左）・土壙10（右）（1／60）……14

図　版　目　次

図版１　1．原遺跡から望む西奥遺跡（南東から）
2．第１調査区全景（南東から）
3．第２調査区全景（南東から）
図版２　1．第３調査区全景（南から）
2．土壙２掘り下げ途上（南東から）
3．土壙２掘り上げ状況（南東から）
図版３　1．第４調査区全景（北から）
2．土壙４（南東から）
3．土壙５（北西から）
図版４　1．土壙６掘り下げ途上（西から）
2．土壙６掘り上げ状況（西から）
3．土壙７（北から）
図版５　1．第５調査区全景（北西から）
2．土壙９（西から）
3．土壙10（南から）
図版６　第３調査区出土遺物
図版７　第４・５調査区出土遺物

Ⅰ．　地理的・歴史的環境

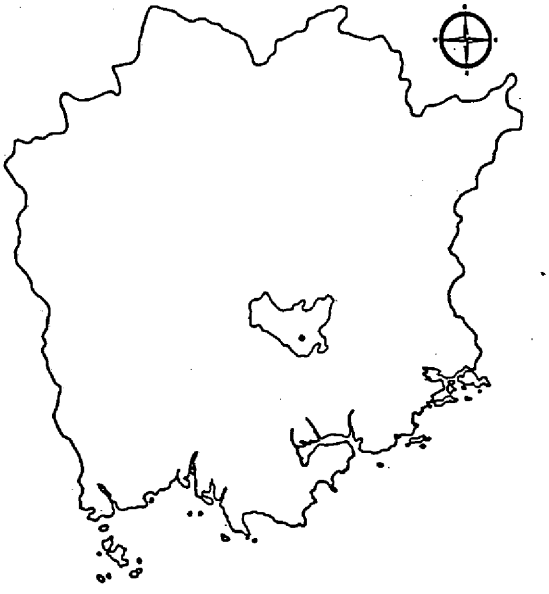
西奥遺跡は，東西方向に連なる山塊から南に延びる短い尾根の上に立地する。この山塊は十二本木山山地の東端部にあたる。この山地は，十二本木山414ｍ，土倉山401.5ｍ，龍王岳356ｍなどの中起伏山地よりなり，東端には妙見山261ｍが位置する。この妙見山と西方の赤岳330ｍの間は，洪積世の砂礫層（山砂利層）によって構成されており，旭川の古い流路にあたる。山地は，旭川の支流宇甘川と三谷川に挟まれており，北を流れる宇甘川は，山地東端で旭川と合流する。山塊の南には大きな平野が広がっており，三谷川は平野の南端で旭川と合流する。

この旭川右岸に展開する広い沖積平野には，山裾を廻る大きな旧河道の他に，平野中央部を流れる幾筋かの河道が認められるが，広い微高地を形成し，周辺の低湿地とともに，比較的安定した生活基盤を提供していたといえる。

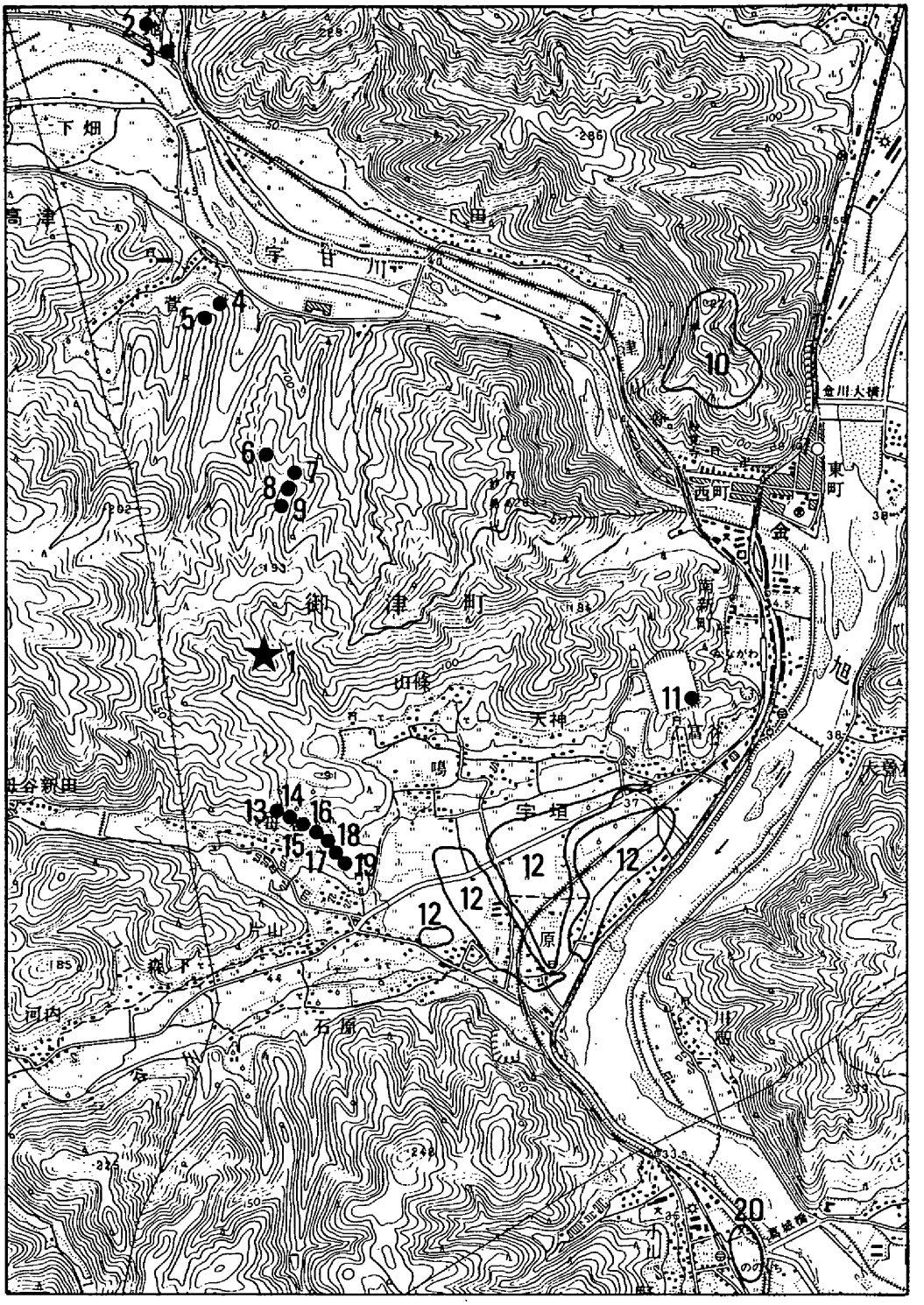
御津町内において現在知られている最も古い遺物は，旭川左岸の伊田岩井山丘陵出土の縄文時代後期の土器であるが，縄文時代晩期にはこの平野部周辺での生活が始められている。鹿瀬遺跡，野々口遺跡，原遺跡が知られており，野々口遺跡では，縄文時代晩期の土器片包含層中に多量の椎の実・ドングリなどが発見されている。

原遺跡は，打製石器を伴った多量の土器片の出土により注目を集め，この土器群は「原下層式土器」として岡山県の縄文土器編年の中で晩期中葉を代表する型式となっている。また，打製石器は，農耕具とも考えられている。

このように縄文時代晩期の遺跡として著名になった原遺跡であるが，ここでの生活は弥生時代にも引き継がれる。昭和57年度に岡山県教育委員会が実施した調査においては，弥生時代前期の土器が縄文時代晩期の土器と共伴して出土することが確認されている。また，第２図に示す広大な微高地の各所で当時の集落が営まれたことも推定されている。弥生時代中期の遺構も検出され



第１図　御津町及び西奥置跡の位置



第２図　周辺遺跡分布図(1／25,000)

ているが，後期に至って遺構数は増し，大規模な集落へ発展したことを物語っている。現在，同遺跡について御津町教育委員会が調査を続けているが，微高地縁辺部にあたる鳴地区において，これら集落の生活を支える水田の遺構を確認している。なお，古墳時代以降についても，中世にまで至る間の遺物が出土している。

西奥遺跡の位置する山塊では，金川古墳，菅１・２号墳，みそのお１～４号墳，宇根山１～７号墳の14基の古墳が確認されている。しかし，平野に南接する山塊及び旭川左岸の山塊では古墳は確認されておらず，広大な平野を取り囲む地理的条件からは，少ない数といわざるをえない。

主要参考文献

(1) 御津町史編纂委員会　『御津町史』　御津町　1985年

(2) 鎌木義昌・江坂進　「岡山県御津町原遺跡――縄文晩期の土器を中心として――」『瀬戸内考古学』第２号　1958年

(3) 神原英朗他　『岩井山古墳群』　御津町教育委員会　1976年

(4) 平井勝　『金川古墳』　御津町教育委員会　1982年

(5) 松本和男　「原遺跡」　『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』54　岡山県教育委員会　1983年

周辺遺跡一覧

1	西奥遺跡	6	みそのお４号墳	11	金川古墳	16	宇根山４号墳
2	実盛山古墳	7	みそのお３号墳	12	原遺跡	17	宇根山３号墳
3	雲生宅跡	8	みそのお２号墳	13	宇根山７号墳	18	宇根山２号墳
4	菅１号墳	9	みそのお１号墳	14	宇根山６号墳	19	宇根山１号墳
5	菅２号墳	10	金川城跡	15	宇根山５号墳	20	野々口遺跡

Ⅱ. 調査の経緯

1. 調査に至る経緯

御津工業団地造成が企画されたのは，昭和56年度にさかのぼる。岡山県では，新たな工業団地建設を計画するにあたって「工業団地建設に伴う基礎調査」を昭和56年度下半期に実施し，県内12か所の候補地を選定した。さらにこの中の６か所について，昭和57年12月～昭和58年３月に基本調査を実施し，基本設計をまとめた。御津工業団地もこの６か所に含まれ，吉備高原地帯で進められているテクノポリス構想との関係からも，有力な候補地となった。

この昭和58年段階の基本設計では，南北２区を合わせた事業対象地は81.5haで，対象地内には周知の古墳13基（第２図４～９・13～19）が所在した。このため岡山県教育庁文化課では，これらの古墳について現状保存を図るよう要請し，基本設計の見直しの結果，先行着手される南区では宇根山１～７号墳の７基が工事対象から除かれ，保存されることとなった。

昭和59年８月には，岡山県商工部の依頼により，文化課職員が分布調査を実施したが，未伐開のために詳細な踏査ができず，伐開後の再調査が必要な旨を回答した。

その後，昭和60年１・２月には，伐開の終了した奥池南の丘陵に対して確認調査を実施した。当該地点は，原遺跡を望む好位置にあるが，遺構・遺物とも検出されなかった。

これらの経緯をふまえて，昭和60年度には本格的な土木工事が始まった。最終計画によれば，事業対象地は103haに及び，南区の工事対象面積は36haである。後に西奥遺跡が発見される尾根は標高110ｍまで削土され，この土で両側の谷を埋める計画となった。

工事対象域の伐開がすべて終了した昭和60年11月５日に，御津町教育委員会から尾根上に古墳状の高まりが認められる旨連絡があり，文化課職員が踏査した結果，弥生時代～古墳時代と考えられる土器片を採集した。古墳状の高まりについては，にわかに古墳とは断定しがたく，これも含めた尾根筋の確認調査を実施することとした。

確認調査は御津町教育委員会が調査主体となって昭和60年11月13日に実施した。基本的には重機による尾根筋の縦走的試掘を主眼とし，古墳状の高まりをも試掘した。その結果，古墳状の高まりについては，盛土の状況は認められず，区画のための溝も確認されなかった。しかし，尾根上の３地点及び斜面にかかる１地点で，弥生時代後期の遺物・遺構が確認されたのである。

この確認調査結果を基に，岡山県教育庁（文化課）と岡山県商工部（企業立地対策課）でその保存について協議したが，遺跡の位置する尾根が切盛土工の中心となるため，設計変更は不可能であった。このため，やむなく発掘調査を実施することとなった。

2. 調査体制

岡山県古代吉備文化財センター

所　長　　松元昭憲　（昭和60年12月16日～高橋誠記）

次　長　　橋本泰夫

総務課　課　長　　佐々木清

　　主　査　　遠藤勇次

　　主　任　　花本静夫

　　主　事　　楢原充二

調査課　課　長　　河本　清

　　文化財保護主査　　松本和男

　　文化財保護主任　　高畑知功

　　文化財保護主事　　平井泰男・光永真一（調査担当）

3. 日　誌　抄

昭和60年

11月25日（月）○調査開始。第1・2・4調査区，重機による表土除去。

26日（火）○器材搬入。第5調査区，重機による表土除去。第1・2調査区，遺構検出。

27日（水）○第4調査区，遺構検出。

28日（木）○第4調査区，遺構検出。

29日（金）○第1調査区，掘り下げ。第2調査区，写真撮影・平板実測。

30日（土）○第1調査区，写真撮影・平板実測。

12月2日（月）○第1調査区，写真撮影。第4調査区，遺構検出。

3日（火）○第4調査区，土壙4～8掘り下げ。同区，古道サブトレンチ掘り下げ。

4日（水）○第4調査区，土壙6実測。同区，全景及び土壙4～8写真撮影。

5日（木）○第3調査区，重機による表土除去。第4調査区，平板実測。第5調査区，土壙9・10掘り下げ・写真撮影。

6日（金）○第3調査区，遺構検出・土壙1掘下げ。第4調査区，土壙4・6写真撮影。第5調査区，平板実測。

7日（土）○第3調査区，土壙2・3掘り下げ・写真撮影。同区，写真撮影・平板実測。

9日（月）○器材撤収。調査終了。

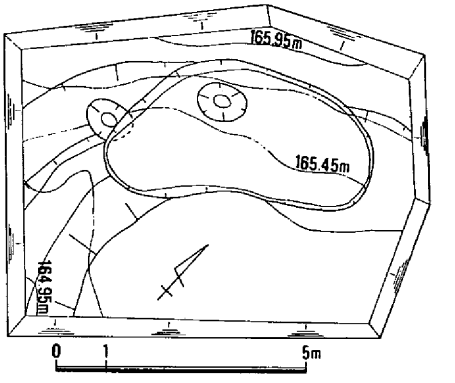
Ⅲ. 調査の概要

1. 第1調査区

第1調査区は，確認調査において，遺物は出土しなかったが，炭・灰の薄い堆積層が認められたため，住居址の遺存する可能性がある地点として設定した。調査面積は約50㎡である。

表土除去面でまず検出されたのは，長径100㎝，短径70㎝，深さ20㎝を測る楕円形の窪みで，内面は熱影響を受けており，堆積土下位に炭・灰の薄い層が見られる。焚火の跡と考えられるが，遺物を伴わないため，時期は不明である。これに切られる形で，長径6m，短径2.5m，深さ約40㎝の浅い窪みがあるが，これも遺物を伴わない。さらに，これに切られて，推定長径100㎝，短径75㎝，深さ約20㎝を測る前出の窪みと同様の状況を呈する炭・灰を伴う窪みがある。

これらの時期不明な窪みの下層には，西斜面へ延びる幅3m，深さ15㎝前後を測る弧状の浅いたわみがある。この堆積土から，弥生土器（壺・甕・高杯）の小片が出土しており，甕の口縁部に櫛描の沈線をもつものがあることから，弥生時代終末期から古墳時代初頭に比定されるが，このたわみを遺構とは考え難い。

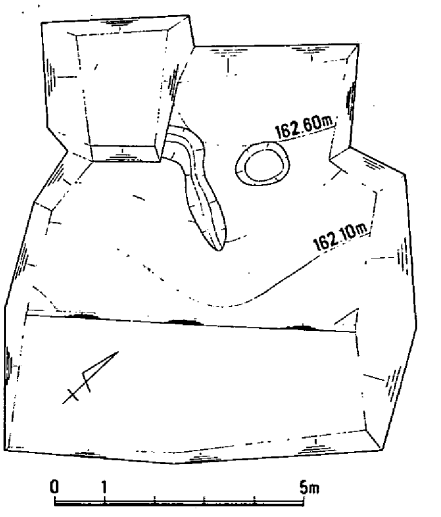


第3図　第1調査区全体図(1／150)

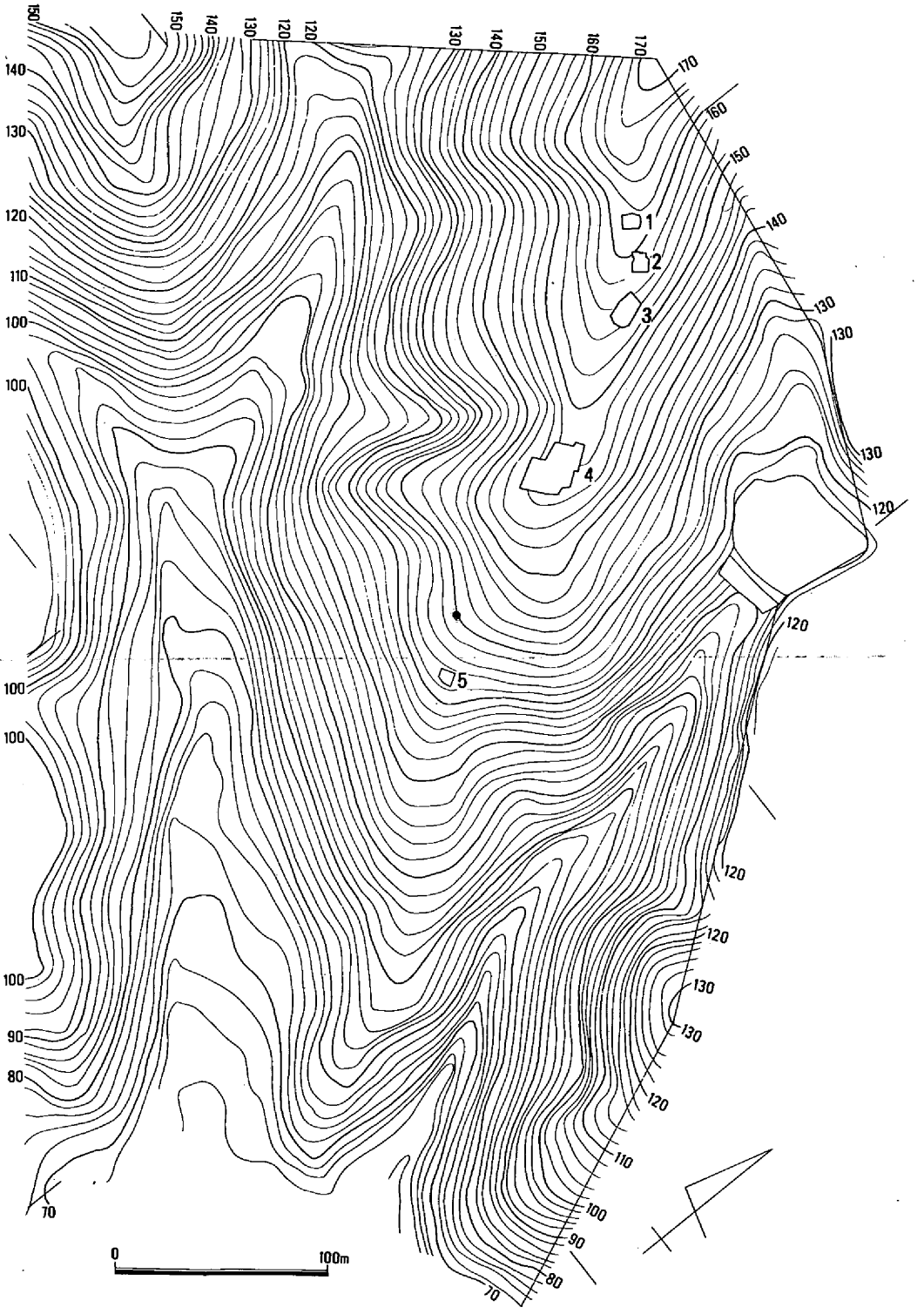
2. 第2調査区

第1調査区と第3調査区の間の緩斜面に設定した。面積は約60㎡である。

調査区南半には，表土下に淡黄褐色土が厚いところで30㎝以上堆積している。北半においては，長径110㎝，短径85㎝，深さ約10㎝の楕円形の窪みと，幅50㎝前後，深さ10～20㎝の溝状の窪みを検出したが，いずれも遺物を伴わない。後者については，尾根筋を通る古道の跡と考えられる。



第4図　第2調査区全体図(1／150)



第5図　地形及び調査区位置図(1／3,000)

3.　第３調査区

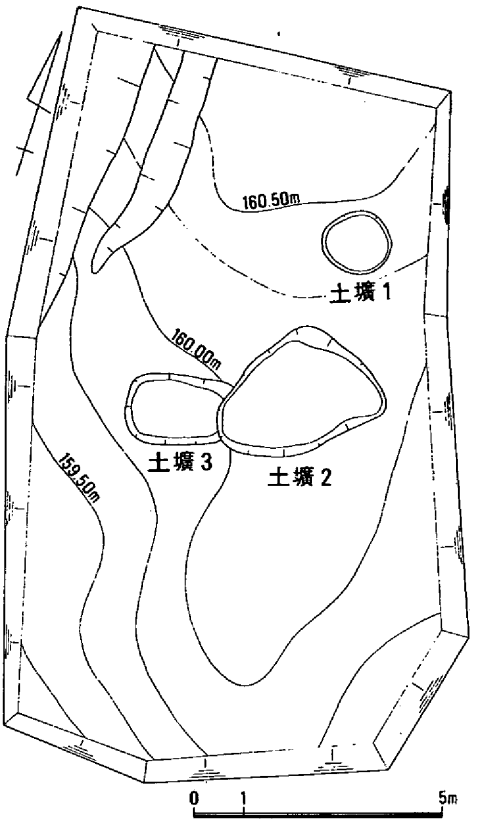
第３調査区は，確認調査において特殊器台１・３及び特殊壺２が出土した地点に設定した。面積は約130㎡である。検出されたのは，土壙３基と古道２本である。１～３は，土壙２に伴うと考えられる。

土壙１

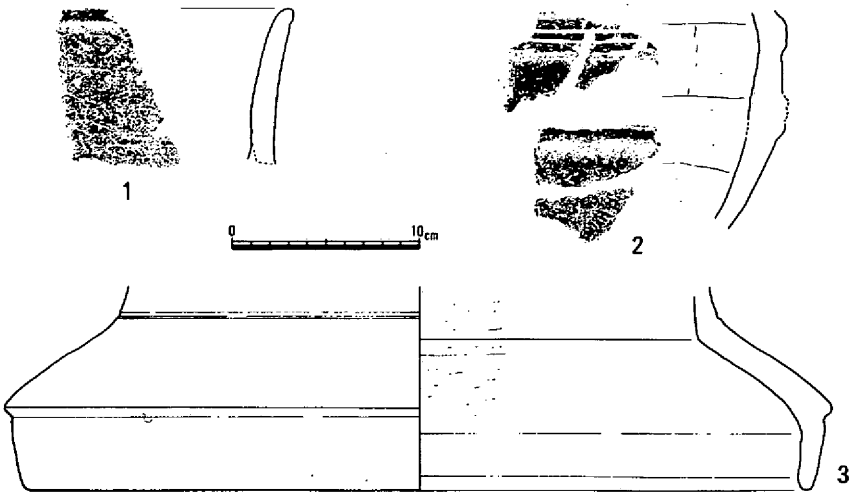
長径140cm，短径125cm，深さ10cm弱を測る楕円形の浅い土壙である。弥生土器小片の出土により，他の２基と同時期と考えたい。

土壙２

調査区の位置する尾根の背にあたる部分に造られた土壙で，長軸を尾根筋に直交して置いている。平面形は，楕円に近い不整形で，長径340cm，短径230cm，深さ25cmを測る。埋土中には，検出面に突出するように拳大～人頭大の角礫が不規則に混入していた。これらは中央部に集中してはいるが，いずれも底



第６図　第３調査区全体図(1／150)

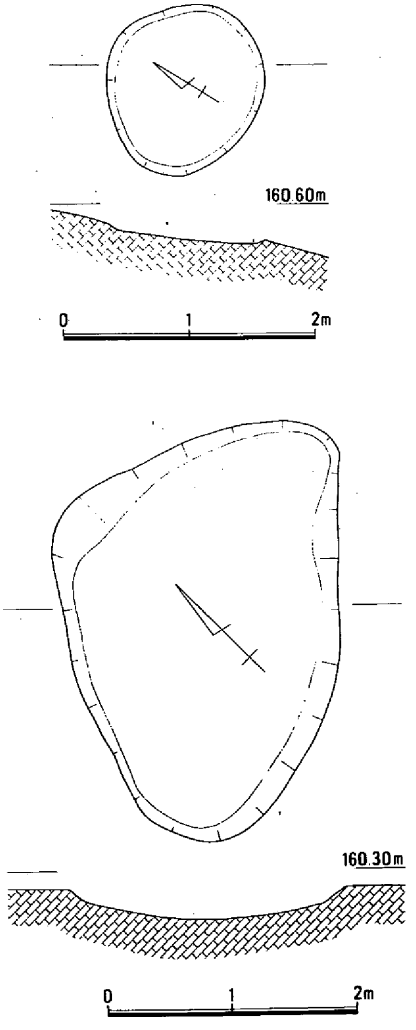


第７図　第３調査区確認調査出土遺物(1／4)

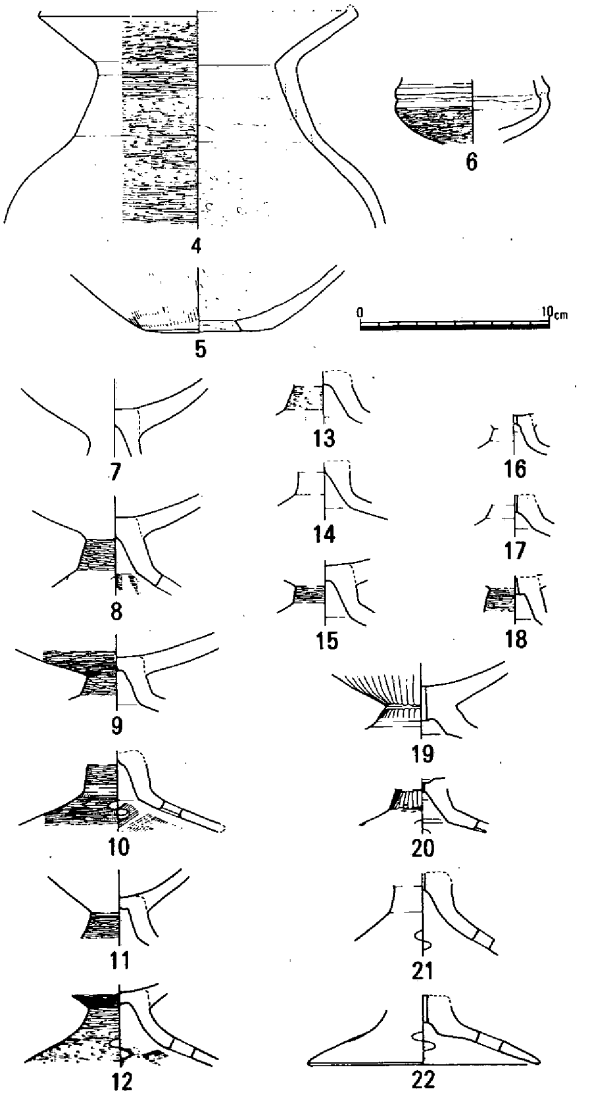
面からは浮いており，他の出土遺物も同様である。

出土遺物は，弥生土器の壺4・5，小形台付壺6，高杯7～22他多数あり，特殊器台1・3，特殊壺2についても，3の接合資料が出土していることから，土壙2に伴うものと考えられる。

特殊器台1・3及び特殊壺2は，いずれも胎土は同じで，径2㎜以下の石英・長石・角閃石粒を含んでいる。器表面の風化が顕著であるが，焼成は良好で，色調は褐色を呈する。1は口縁部片で，外面には板状工具による平行沈線がかろうじて残っている。3は脚裾部から脚直立部の破片で，脚直立部は内外面ともヨコナデ仕上げ，脚裾部以上の内面は横方向のヘラケズリ



第8図　土壙1(上)・土壙2(下)(1／60)



第9図　土壙2出土遺物(1／4)

であるが，左右は不明である。脚直立部上端に一条の突帯が廻り，筒部と脚裾部の屈折点の凹線も突帯貼り付けのための調整の可能性がある。3は外面に2条の突帯をもち，これに2条の沈線がひかれている。内面は左方向へのヘラケズリ，外面はナデによる調整である。

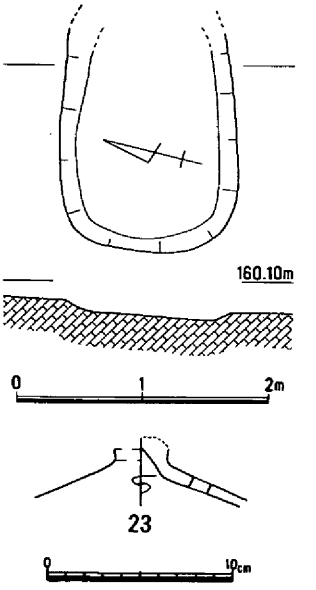
高杯は，図示以外にも5点以上あり，16～22にみられる脚部中心の貫通孔が特徴的である。壺4・5は同一個体で，他に胴部片もある。肩部と頸部は接合点が不明確で，もう少し肩のはる可能性がある。底部穿孔は焼成後と考えられる。

時期は，これらにより弥生時代後期後半に比定される。

土壙3

土壙2に東端部を切られているが，最大長180cm，幅140cm，深さ17cmを測る隅丸長方形の浅い土壙である。

遺物は，高杯23等の弥生土器若干が出土しており，土壙2との関係からも弥生時代後期後半に位置づけられる。



第10図　土壙3（1／60）
・出土遺物（1／4）

4.　第4調査区

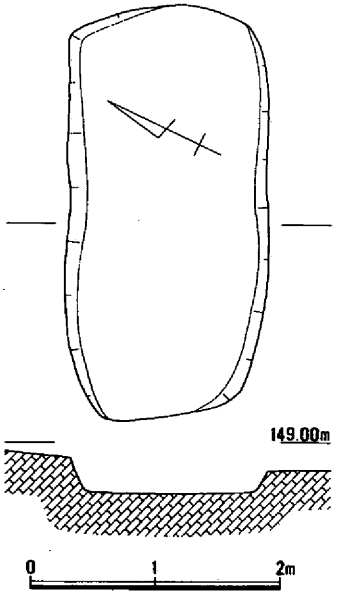
第4調査区は，確認調査において土壙（土壙6）を検出したことと，近接する墳丘状の高まりにトレンチを入れられなかったことにより設定した。面積は約430㎡である。

調査の結果，土壙5基と古道6本が検出され，高まりは尾根上を錯走する古道によって墳丘状に削り出されたものと判明した。

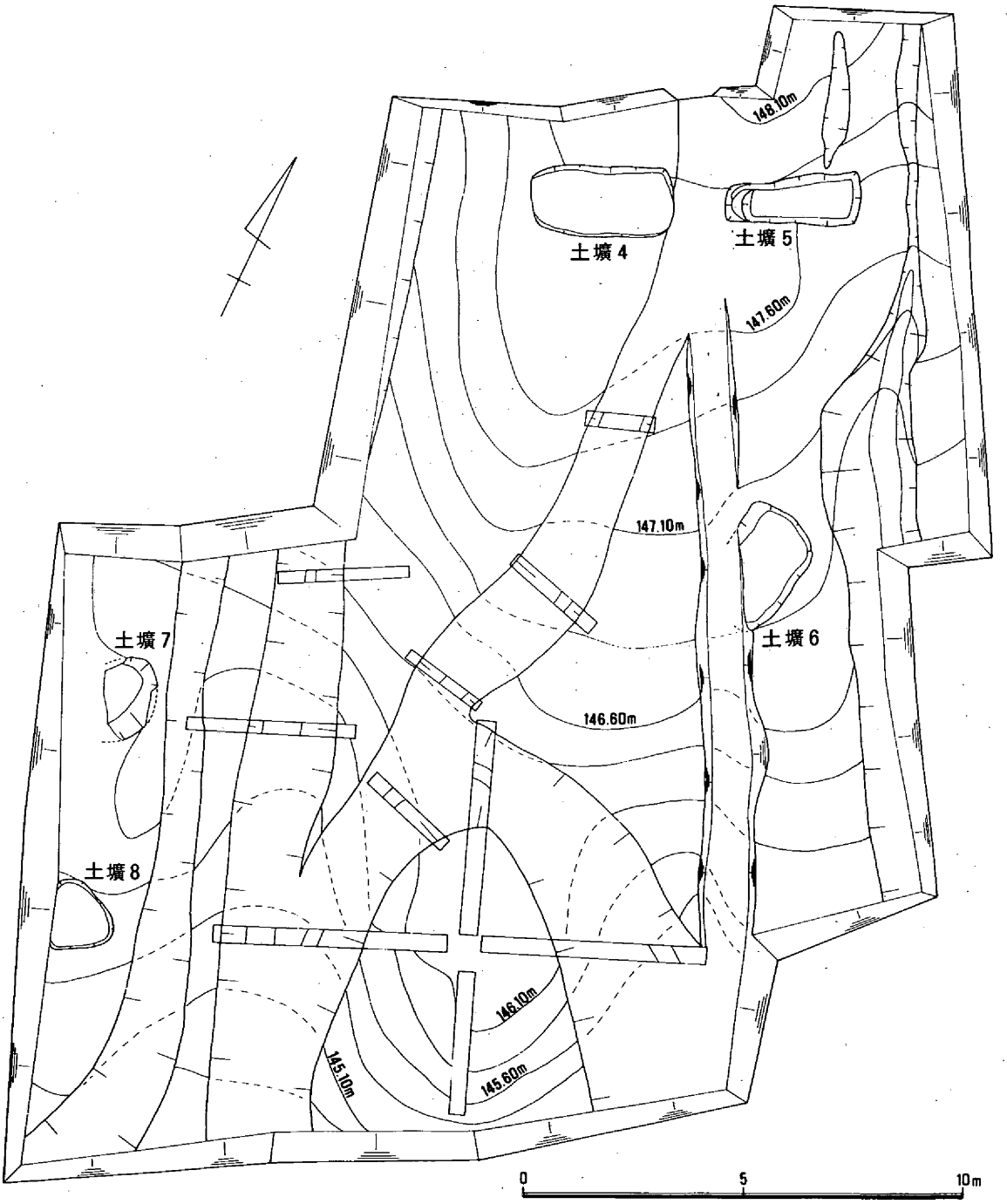
土壙4

尾根筋に直交し，土壙5と長軸方向をそろえる平面長方形の土壙であり，長辺325cm，短辺160cm，深さ26cmを測る。埋土内に一辺30cm以上の角石を含むが，遺物は伴わない。

遺物がないため，時期を比定しえないが，土壙5とは同時期と考えられる。



第11図　土壙4（1／60）

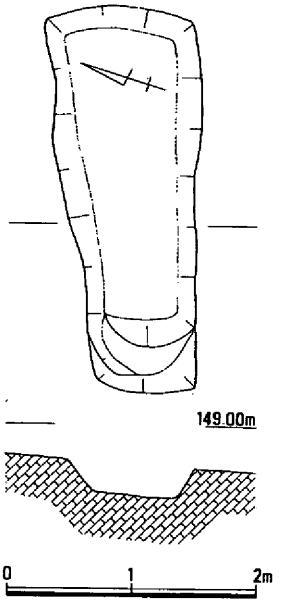


第12図　第4調査区全体図(1／150)

土壙５

土壙４の東1.2mに，長軸をそろえて位置する平面長方形の土壙で，長辺310cm，短辺80～120cm，深さ15cmを測る。西端部に段をもち，底部の長さは230cmである。長辺に若干の凹凸はあるものの，平面形からも深さからも10基の土壙中で最も遺存状態が良いものである。

この土壙も遺物を伴っておらず，土壙４以外の土壙との同時期性は明確でない。



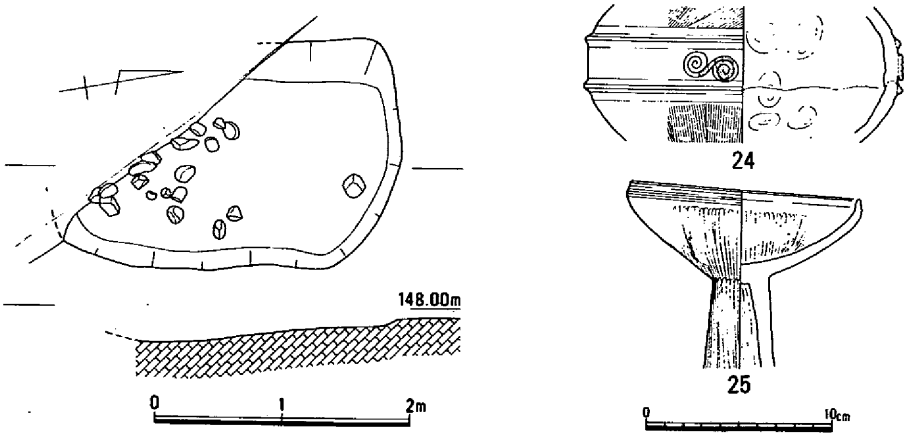
第13図　土壙５(1／60)

土壙６

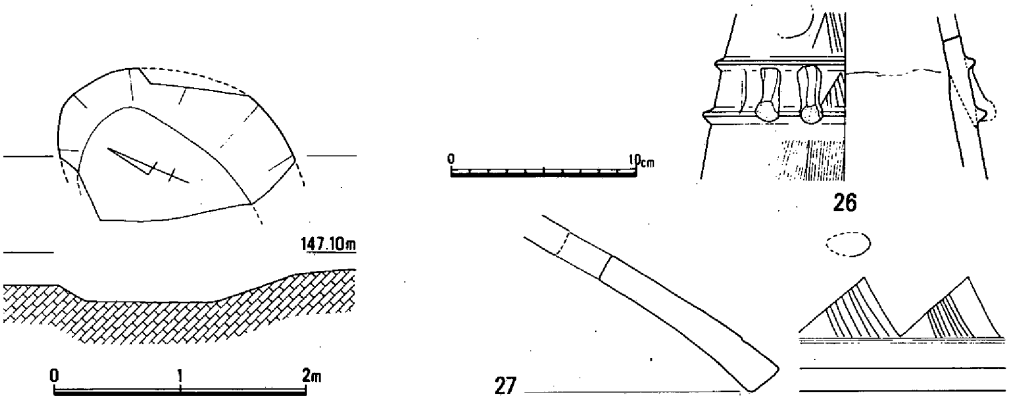
確認調査によって南西部を失っているが，幅約180cm，深さ20cmを測る隅丸長方形の土壙である。長さは，現存最大長265cmを測るが，トレンチの対壁に至らないことからも300cm前後に求められよう。底面は平坦にならず，北西部に浅く，南東部に深くなっている。埋土上位には，拳大の円礫・角礫が南東部に集中して混入しており，遺物もこれらの間から出土している。円礫は，洪積世砂礫層によって構成される地山に含まれるものである。

遺物には，台付壺24・高杯25があり，確認調査及び表土除去中に出土した高杯30・器台29についても，これに伴うものと考えられる。台付壺24は，体部に２条の突帯をもち，その間に連続渦状の浮文を推定４か所に配置している。同一個体と考えられる体部片の観察によれば，台部との屈折点に１条の突帯をもつ。器台29の器高は不明である。

時期は，弥生時代後期後半に比定される。



第14図　土壙６(1／60)・出土遺物(1／4)



第15図　土壙7(1／60)・出土遺物(1／4)

土壙7

土壙4～6から西にやや離れて位置する。西半を失っているが，平面形は楕円形が想定され，現存長140cm，推定幅140cm，深さ22cmを測る。

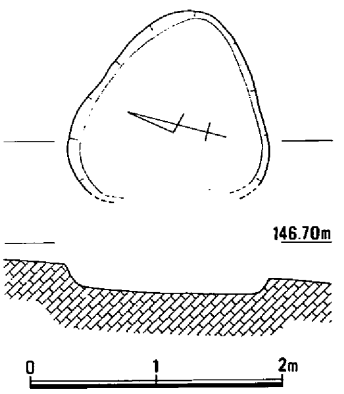
遺物は，器台26・27の他に壺小片がある。26は，2条の突帯間に獣足状の浮文を貼り付け，突帯上位には円形の透孔をもつ。突帯間及び突帯直上位に鋸歯文が刻まれている。

時期は，土壙6と同時期に求めたい。

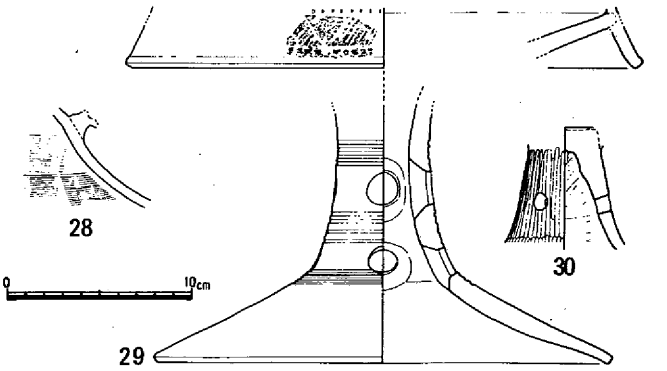
土壙8

土壙7の南3mに位置する不整楕円形の土壙で，長径180cm，短径150cm，深さ17cmを測る。

遺物は，装飾高杯28の他に高杯片がある。28は裾部の屈折点に，連続刺突文をもつ1条の突帯を廻らせている。時期は，土壙6と同時期に比定される。



第16図　土壙8(1／60)



第17図　土壙8出土遺物及び
第4調査区確認調査出土遺物(1／4)

5．　第５調査区

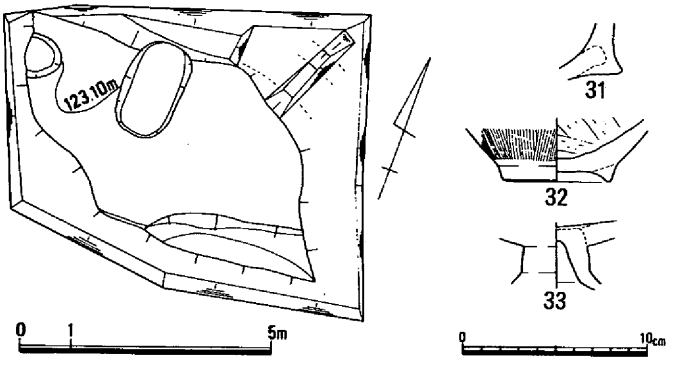
第１～４調査区が尾根上の平坦部ないし緩斜面に位置するのに対して，第５調査区は，尾根筋とはいえ斜面に位置する。現地形では，斜面に造り付けられた方形の台状を呈すため，確認調査において，この平坦面の表土を除去したところ，土壙（土壙10）を検出した。このため，ここに約40㎡の調査区を設定した。

調査の結果，この平坦面は地山を削り出して造られたもので，その上に２基の土壙を配置した状況が明らかになったが，山側・谷側とも古道による改変を受けていた。

土壙９

西半を古道によって削られており，現存長70cm，幅90cm，深さ15cmを測るのみである。

遺物は出土していないが，土壙10と同時期と考えられる。



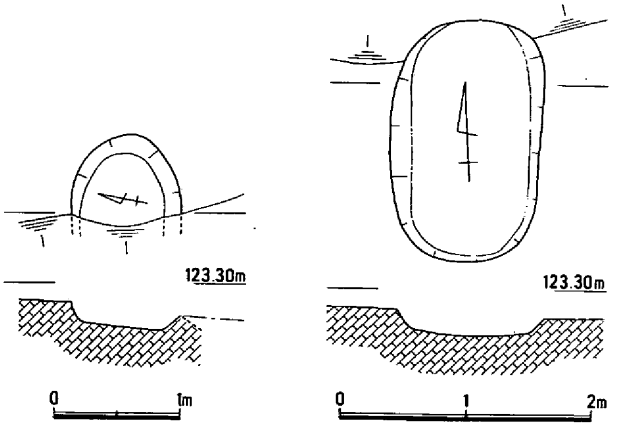
第18図　第５調査区全体図(1／150)・土壙10出土遺物(1／4)

土壙10

北端を古道に削られているが，ほぼ全容を留めている。平面形は長方形に近い楕円形で，長径195cm，短径120cm，深さ19cmを測る。

遺物は，壺ないし器台の口縁部片31，壺底部片32，高杯33等がある。高杯片には丹塗りもみられる。

時期は，弥生時代後期後半に比定される。



第19図　土壙９(左)・土壙10(右)(1／60)

Ⅳ. ま と め

西奥遺跡において検出された遺構は土壙10基で，これらに伴う遺物は壺・高杯・器台及び特殊器台・特殊壺の弥生土器である。時期は，弥生時代後期後半の枠でとらえられる。その関係から導かれる遺跡の性格は，弥生時代後期後半の土壙墓からなる墓址である。

ここでは，その性格を念頭において，遺構・遺物について検討してみたい。

遺構について

10基の土壙のうち，全容が把握できるのは5基である。平面形態は，長方形ないし隅丸長方形を呈するものが土壙3・4・5・6の4基で，土壙10もこれに近い。特殊器台・特殊壺を出土した土壙2は楕円に近い不整形である。規模は，土壙10の195cm×120cm×19cmから，土壙2の340cm×230cm×25cmまで大小の差があるが，遺存状況の良い土壙5は310cm×120cm×15cmである。深さについては10～26cmと比較的浅いものであるが，これは尾根上に立地するという遺存条件の悪さによるものと認めうる。

特殊器台・特殊壺を伴う土壙墓は，落合町中山遺跡，哲西町西江遺跡[1]，真備町西山遺跡[2]，倉敷市辻山田遺跡・女男岩遺跡[3]，鴨方町和田遺跡[4]，山陽町便木山遺跡[5]，矢掛町芋岡山遺跡[6]，神郷町古坊遺跡[7]，新見市横見墳墓群[8]等で報告されている。本遺跡の土壙3・4・5・6・10にはこれらと共有の要素を認められるが，土壙2は平面形がやや不整に過ぎるともいえる。

土壙2・4・6では，埋土中に円礫・角礫の混入が見られるが，いずれも土壙底面からは浮いた状態である。また，規則性に欠けており，壙内にこれらを用いた構造物があったとは考えられない。

遺物について

土壙4・5・9以外の7基は遺物を伴っている。土壙1は弥生土器小片のみであるが，土壙2からは壺・小形台付壺・高杯・特殊器台・特殊壺，土壙3から高杯，土壙6からは台付壺・高杯・器台，土壙7からは壺・器台，土壙8からは高杯・装飾高杯，土壙10からは壺ないし器台・壺・高杯が出土している。この器種構成をみると，甕を欠いており，特殊器台1・3，特殊壺2，小形台付壺6，台付壺24，装飾高杯28，器台26・27・29及び壺5の底部穿孔，高杯16～22にみられる貫通孔等の墓址に伴う遺物の特徴を示している。

特殊器台・特殊壺については，その時間的・空間的な限定性及び用途の限定性から注目されている。今回出土した特殊器台1・3，特殊壺2について，その編年的位置を求めれば，3の突帯の形状や2の2条の突帯などの特徴により向木見型[11]に属するものと考えられる。

時期について

遺跡全体については弥生時代後期後半という枠でとらえたが，各調査区ごとに時期差が認め

られる。主に高杯によってその時期を考え，岡山市百間川遺跡群における時期区分にあてはめると，第4調査区を百間川弥生時代後期Ⅲ期に，第3・5調査区を百間川弥生時代後期Ⅳ期にそれぞれ比定できる。[12] したがって，尾根の南端部がまず墓域として設定され，特殊器台・特殊壺が用いられる時期には尾根の高所が墓域とされていたと考えられる。

西奥遺跡を墓域とする集団の居住域は原遺跡に求められる。この平野部への定住は，縄文時代晩期に始まり，弥生時代後期には集落址が微高地全域に広がり，縁辺部で水田を経営していた状況が確認されている。この安定した生活基盤をもつ集団が，弥生時代後期後半にはその葬送儀礼に特殊器台・特殊壺を用いるに至ったのである。

註

(1) 山磨康平ほか 『中山遺跡』 岡山県落合町教育委員会 1978年

(2) 正岡睦夫ほか 「西江遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』20 岡山県教育委員会 1977年

(3) 正岡睦夫ほか 『西山遺跡』 岡山県真備町教育委員会 1979年

(4) 間壁忠彦ほか 「辻山田遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館 1974年

(5) 間壁忠彦ほか 「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 倉敷考古館 1974年

(6) 伊藤晃ほか 「和田遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』42 岡山県教育委員会 1981年

(7) 神原英朗 「便木山遺跡発掘調査報告」『岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査概報』(2) 岡山県赤磐郡山陽町教育委員会 1971年

(8) 間壁忠彦ほか 「岡山県矢掛町芋岡山遺跡調査報告」『倉敷考古館研究集報』第3号 倉敷考古館 1967年

(9) 井上弘ほか 「古坊遺跡の調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 岡山県教育委員会 1977年

(10) 下澤公明ほか 「横見墳墓群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 岡山県教育委員会 1977年

(11) 狐塚省蔵 「吉備型器台論」『異貌』第四号 共同体研究会 1976年

宇垣匡雅 「特殊器台形土器・特殊壺形土器に関する型式学的研究」『考古学研究』第27巻第4号 考古学研究会 1981年

高橋護 「組帯文の展開と特殊器台」『研究報告』5 岡山県立博物館 1984年

等の研究がある。

(12) 江見正己ほか 『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39 岡山県教育委員会 1980年

図　　版

図版 1

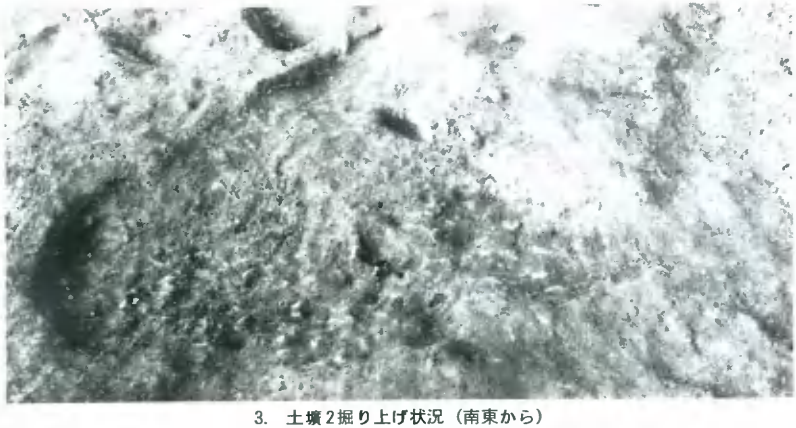
1.　原遺跡から望む西奥遺跡（南東から）

2.　第 1 調査区全景（南東から）

3.　第 2 調査区全景（南東から）

1. 第 3 調査区全景（南から）

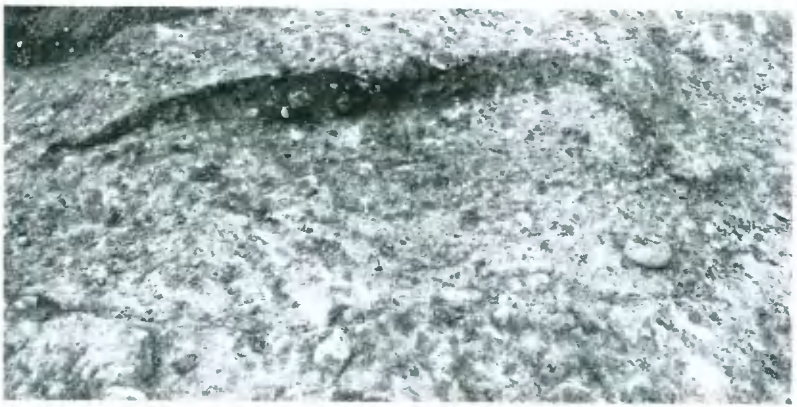
2. 土壙 2 掘り下げ途上（南東から）



3. 土壙 2 掘り上げ状況（南東から）

図版 3

1. 第 4 調査区全景（北から）

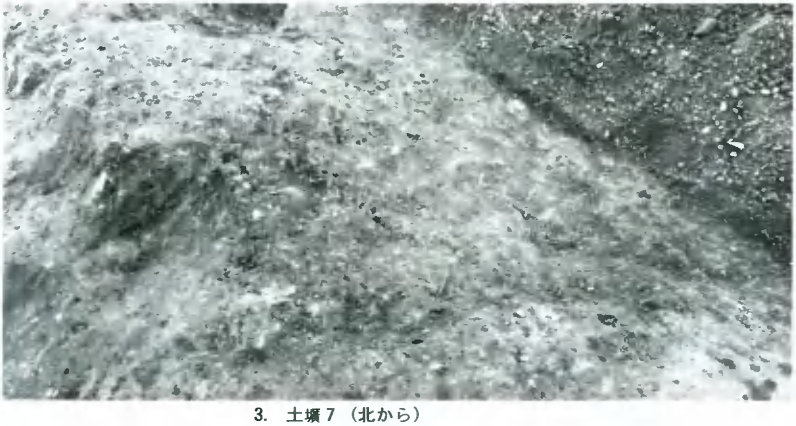


2. 土壙 4 （南東から）

3. 土壙 5 （北西から）

1. 土壙 6 掘り下げ途上（西から）

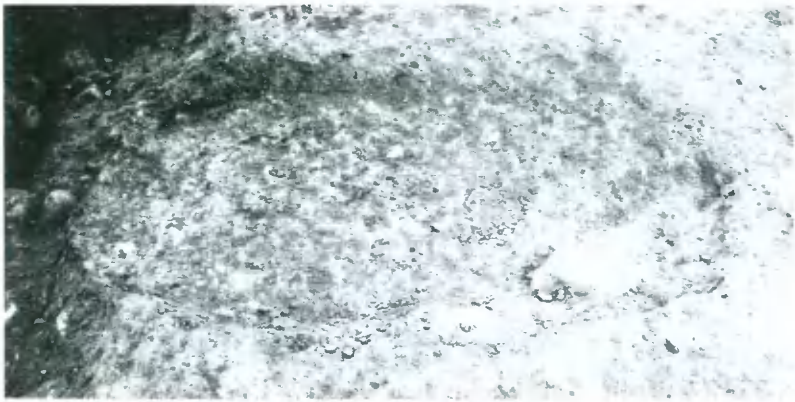
2. 土壙 6 掘り上げ状況（西から）



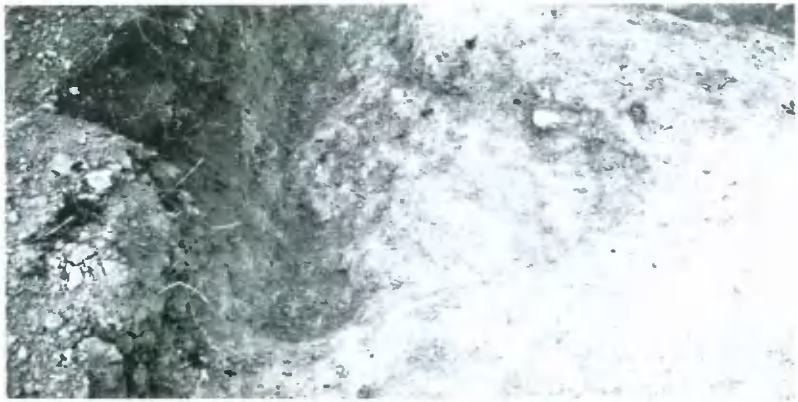
3. 土壙 7（北から）

図版 5

1. 第 5 調査区全景（北西から）



2. 土壙 9（西から）



3. 土壙10（南から）

第 3 調査区出土遺物

図版 7

29

24

25

31

32

26

33

27

第 4 ・ 5 調査区出土遺物

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　63

西　奥　遺　跡

昭和61年3月15日印刷
昭和61年3月31日発行

編集・発行　岡山県教育委員会
印　　刷　柳本印刷株式会社